

まっぼう い ほ け きょう たも  
 末法に入って法華経を持つ  
 なんによ 姿 ほか ほうとう  
 男女のすがたより外には宝塔な  
 きなり。もししからは、貴賤上  
 げ 選  
 下をえらばず、南無妙法蓮華経  
 唱  
 ととなうるものは、我が身宝塔  
 わ み た ほうによらい  
 にして我が身また多宝如来なり。  
 みょうほうれん げ きょう ほか ほうとう  
 妙法蓮華経より外に宝塔なきな  
 ほ け きょう だいもく ほうとう  
 り。法華経の題目、宝塔なり。  
 ほうとう  
 宝塔また南無妙法蓮華経なり。

(御書新版1732ページ・御書全集1304ページ)

### 通解

はい たも  
 末法に入って、法華経を持つ男女  
 の姿よりほかには宝塔はない。もし  
 そうであるならば、貴賤上下にかか  
 わらず、南無妙法蓮華経と唱える人  
 は、わが身がそのまま宝塔であり、  
 わが身がまた多宝如来なのである。

妙法蓮華経よりほかに宝塔はない  
 のである。法華経の題目は宝塔であ  
 る。宝塔はまた南無妙法蓮華経であ  
 る。

## 心を輝かせて希望を送る人に

### よくわかる解説

皆さんこんにちは！ サンです！ 寒さが少しず  
 つ和らいできたね。今日も元気に御書を学んでいこ  
 う☆

今回学ぶ「阿仏房御書」は、日蓮大聖人が身延で  
 著され、佐渡の中心的な門下である阿仏房へ送られ  
 たお手紙です。阿仏房は、もともと熱心な念仏信者  
 でしたが、大聖人の振る舞いに強く心を動かされ、  
 法華経に帰依したとされています。

本抄は、「法華経に説かれる多宝如来や宝塔の涌  
 現とは、一体、何を表しているのか」という阿仏房  
 の質問に対して、大聖人が答えられた一書です。

宝塔とは、法華経見宝塔品第11において、大  
 地から現れて空中に浮かぶ巨大な塔を指します。  
 金や銀などの七宝で飾られており、その大きさは  
 地球の直径の3分の1から半分にも及ぶとされま  
 す。

大聖人は、この無限の価値がある宝塔について、  
 「法華経を持つ男女にほかならない」と述べられて

います。また、世間的な地位なども一切関係なく、  
 題目を唱える人こそ宝塔であり、それほど素晴らし  
 い存在であると仰せです。

つまり、輝かしい宝塔は、どこか遠い存在のもの  
 ではない。題目を唱えて、自分の尊い可能性を聞く  
 私たち自身のことなんだ。

時には、自分と周りを比べて心が落ち込み、暗闇  
 の中にいるような沈んだ気持ちになるかもしれない。  
 その心に一筋の光がともすことができるのが、題目  
 だよ。題目をあげていくと、“自分らしく頑張ろう”  
 “きっと大丈夫”と、宝塔のように心がキラキラと輝  
 き、前を向いて進むことができる。さらに、その姿  
 で周りの友達を元気づけられるんだ。

池田先生はつづっています。「信心とは、自分の可  
 能性を信じ抜く戦いです。そして、題目は胸中の希  
 望の力を強めてくれます。その挑戦の人が、幸福の  
 宝塔、勝利の宝塔にならないわけがありません」

題目をあげて心の中の宝塔を輝かせ、周囲に希望  
 を送っていきましょう！